OUMC

大阪大学山岳会 会報
No.6
2004年6月
発　行　大阪大学山岳会
〒565－0871 吹田市山田丘２－１
大阪大学工学部建築工学専攻　大野研究室内
ＴＥＬ０６－６８７９－７６３５
ＦＡＸ０６－６８７９－７６３７

会のルーツは戦前に

副会長　木村　裕一

昨年3月、日本山岳会（JAC）から、阪大学生部と大島輝夫会員の元に手紙が届きました。その内容は「100周年記念事業の一環として100年史の編纂を進めており、その資料の一つとして1930年（昭和5年）までに創立された学校登山クラブの調査をしております」と、調査に協力を依頼するものでした。

我が山岳会は戦後に全学的に創設され、先年、50周年記念事業として白馬山麓の対岳館に記念碑を建立したのですが、戦前の諸先輩の足跡については、まとまった資料もなく、伝承もされていないことに気が付きました。早速、東京では大島さんが、大阪では小生が中心になって調査することにしました。

現在の阪大の前身である大阪帝国大学は31年に大阪医科大学を引き継ぎ、理学部を新設して開学されました。33年に大阪工業大学を併合、戦後の48年に文科系の学部が新設され、49年に新制大学に改革されたという歴史的経緯があったことは、ご承知の通りであります。

大阪医大山岳部の創部の年は分かりませんが、29年の関西学生山岳連盟創設時には活発に活動しており、32年には連盟の事務所が阪大山岳部にあったと記録にうかがえます。特に、水野祥太郎元会長が連盟の記録や、当時の山岳専門誌『ケルン』によく投稿されておられるのが目に付きます。他方、大阪工大の山岳部は前身の大阪高等工業時代からあったようですが、29年に篠田軍治元会長が助教授で赴任されてから活動が活発になったようです。

特に、盛岡英治郎氏は旧制浪速高校時代から対岳館をベースに後立山連峰に多くの足跡を残されました。対岳館社長の丸山庄司氏によると、当時、細野では盛岡さんを知らない人はいなかったほどで、小さかった自分もよく記憶しているとのことでした。また、36年に住友山岳会から逆瀬川上流にあった山小屋の寄贈を受けたこと（38年の阪神風水害で流失）や、志賀高原・木戸池に山小屋を建てた経緯などが判明しました。

顧みるに、戦後、大阪大学山岳会が全学規模で発足して後立山を中心に幾多の記録を残すことになったのは、このような先輩たちの活動を引き継いだものであることが分かります。また、戦前にも医学部と工学部の山岳部活動を統合する試みがなされたが、結局、うまく行かなかったことも分かりました。

今回の調査にご協力いただいた大先輩方は長期にわたり募金活動などにご協力いただきながら、お目にかかったことのない方ばかりでした。しかし、積極的にお答えいただき、大変身近に感じられるようになりました。なかでも、新谷五郎先輩のレポートは戦前の山岳部を知るうえで貴重なものであり、それをまとめていただいたご苦労に心から感謝申し上げます。

戦前の山岳部の歴史を調査して得られた最大の収穫は、阪大山岳会のルーツは大阪帝国大学の前身である大阪医科大学、大阪工業大学までさかのぼることを認識することが出来たことでした。最後に、今回ご協力いただいた戦前の諸先輩から、対岳館に記念碑を建立したことに対し、感謝のお言葉をいただいたことを付け加えておきます。

（次ページに古参会員の報告を掲載）

雨飾山登頂は成らず
夏の白馬集会

本会恒例の夏の白馬集会は03年8月30日から3日間、長野県白馬村八方のホテル対岳館で開かれ、家族同伴組を含め18人が参加した。

初日は会食の後、与兵衛倶楽部で歓談。山岳会の古い資料を調査したり、館主の丸山庄司さんから話を聞いたりした。翌31日は、雨飾山組（3人）と大町の山岳博物館組（10人）に分かれたが、雨飾山組は天気が悪く、小谷温泉より引き返した。

9月1日は穂高CCで懇親ゴルフ。早朝は大町を過ぎても雨だったが、ゴルフ場は曇りのち晴のゴルフ日和で大いに楽しむ。

出席者は次の通り。（敬称略、卒業年次順）

大野義照会長（夫人同伴）、住吉仙也（医29）、田島汎（経28）、山本光二（法29）、二木節夫（工29）、宮本貞雄（工29）、宍戸元（医32）、木村裕一（経31）、岡田博司（法33）、坪井和子（薬33、家族同伴）、米林外茂男（工35）、山本信樹（同）、兼清喜雄（同）、米沢成二（工37）、前沢祐一（同）、佐藤毅（同）

与兵衛倶楽部で

「山岳部は戦前からあった」
古参会員の証言

日本山岳会の依頼をきっかけに始まった戦前の山岳部活動についての調査は、当会の歴史に新たなページを加えることになった。今回はその調査に回答していただいた古参会員からの報告の一部を紹介する。

■川戸俊治氏から

小生は昭和2年に大阪高等工業学校機械科に入学し、昭和5年の卒業時は大阪工業大学専門部でした。入学当時から山岳部はあり、部員は15、6名。校友会より相当額の予算をいただいておりました。平素は六甲山、信貴山、金剛山などへの散策や1日キャンプを月2、3回実施。特に六甲のロックガーデン、道場の岩場ではロッククライミングの練習をしました。

冬は信州関温泉、野沢温泉で7、8日間合宿して山岳スキーの練習をしました。主として山スキーで、ロープウエイなどはなく、スキーの裏にアザラシのシールを貼り、半日登って下りは半時間です。神鍋山、氷ノ山、伊吹山は1泊の旅で冬季1、2回行きました。夏山は昭和2年白馬岳、3年上高地・後立山、4年笠岳・烏帽子岳。その他、四国・剣山、鳥取、白山など。

当時の副食は鰹節・コンビーフ・棒鱈など乾物が主体で、雨具は油紙のカッパ。テント、スリーピングバッグなど30キロ以上の荷物で、上高地に入るには、早朝、島々を出発し、徳本峠まで1日行程で大変でした。篠田先生には現役時にお世話になりました。

小生、現在94歳（明治42年生まれ）。お陰さまで元気で、地区の老人会の世話等をして年に2回、2泊3日の旅行や毎月の歩こう会で近所の名所などを見学しています。学生時代に山岳部に入り、苦しい山登りをした経験が現在役立っていると共に、懐かしい思い出となっています。

■新谷五郎氏から

昭和3、4年頃以前のことは知りませんが、その後のことを簡単に書いておきます。

大阪府立医科大学（帝国大学になる前）では昭和3年12月、一般学生から募集して細野でスキー合宿が行われた。当時は、山岳部員と部員でない学生とのはっきりした区別はなかったと思う。宿となったのは丸山政治氏の家（あたらしや）で、衣類の乾燥室として洋服ダンスを4倍ぐらいの大きさにしたものが用意された。食事は山小屋並みの簡素なものだった。スキー場は、かや場（現在の咲花）であった。私と小林信次（後の坂谷信次、医14年卒）は浪高の尋常科だったが、二人とも兄が府立医大に在学していたので連れて行って貰った。

次の年も12月に政治氏方で合宿。前年の食事に懲りて少々の副食を持っていった。この合宿で、丸山源寿氏（ことぶきや）と丸山与兵衛氏の二人が咲花スキー場の端に冬山テントを張って色々世話をしてくれたのが与兵衛氏との付き合いの始まりで、

その後、盛岡英治郎（浪高同期、工17年卒）の提案で対岳館へ行くようになった。

細野へスキー合宿が移る前は関温泉で合宿していた由。それが細野へ移ったのは、おそらく積雪期登山の訓練を考えて水野祥太郎、南勇吉（後の国里勇吉、医5年卒）両先輩が企画したと考えられ、両人は2年目には冬の唐松岳に登頂している。次の年は両先輩が卒業してしまい、スキー合宿は志賀高原・発哺薬師の湯に移った。

同10年、スキー愛好家が集まって3学部合同の合宿をしようと、理学部は水野健次郎（ヨット部の知り合い）、工学部は河原暐（浪高同期）、医学部は小林信次、新谷が相談して12月末に発哺温泉で合宿をした。しかし、うまくまとまらず、失敗だったと思う。そのため、翌11年には医学部と工学部が合同で細野で年末のスキー合宿を行った。この時は医学部は対岳館、工学部は丸金旅館（丸山金蔵氏宅）に宿泊し、うまく交流が出来なかった。

その後は、冬は志賀高原の志賀ヒュッテ（現在の木戸池温泉ホテル）でスキーを、春は山へ登りたい者が細野に集まって、唐松岳、白馬岳へと積雪登山を楽しんだ。

14年になって大学で志賀高原にヒュッテを建てる話が決まり、志賀ヒュッテの傍にこじんまりした小屋が出来た。医学部の岩永仁雄教授の尽力で建築資材を入手した。このヒュッテ建設には酒井英之君（医15年卒）が大いに働いてくれた。16年には医学部のメンバーは軍医となって内地にいなくなり、新谷も夏に召集されて満州に渡った。従って、その後の動勢は判らない。

24年に復員して大学に戻ったが、既に世代が変わっていたし、私自身、山やスキーどころではなかった。

〈追記〉

1. 関西学生山岳連盟については2度ばかり総会らしい会合に出席した記憶がある。

2. 山岳部の学友会（大学体育会）への入会は私が入学前に既に行われていたと思う。

3. 篠田先生とは在学中に面識があったと思うが、具体的な記憶がない（思い出せない）。だが、戦後、先生に第一次南極調査隊に参加したいと話した時、推薦してやろうかと言われたのを覚えている。

4. 恩地君は小生が暫く在籍していた第三解剖教室（黒津教授）の研究室へよく実験に来ていた。山岳部のメンバーだと承知していたが、山の話をしたことはなかった。

5. 徳永君がインターンの時、「外科をやりたいが、第一外科と第二外科とどちらがよいだろうか」と相談を受けたことがあった。

6. 吉見先輩の大島宛の手紙と小生の記憶が少し違うようだ。小生の記憶では、何とか3学部が一緒に山を楽しむ組織にしたいと尽力したが、果たせなかったという気持ちが強い。工学部の連中とは、浪高で一緒だったメンバーもおり、一緒に行動していた。工学部の方は河原君、遠藤君が詳しいと思う。

7. 浪高時代から世話になっていた対岳館に記念碑が建ったことを心から喜んでいます。一度、昔の道具や資料を持っていって保存して貰えたらと思っています。

（追記は、木村裕一が新谷先輩に面談してお聞きしたり、質問に答えていただいたりしたものです）

■河原暐氏から

私は昭和9年4月から12年3月までの3年間、工学部機械科に学んだわけですが、前身の大阪工業大学山岳部については全然知識がありません。篠田先生からも特別のお話をお聞きした記憶もありません。在学中の記録は戦争で焼けてしまい、細かいことは思い出せません。冬のスキー合宿は行われていましたが、計画的な夏山などは殆どなかったと思います。11年春に遠藤君と北岳、甲斐駒ケ岳、白馬岳へ行った記録は随分前に遠藤君から頂きました。

丸山与兵衛さんとのおつきあいは7年夏から始まり、大学を出るまで白馬、鹿島槍辺りをうろちょろしていたわけですが、工学部山岳部と言うより浪高山岳部OBと言った感じであったと思います。大学に入った9年の夏も細野に行き、未だ高校生活を楽しんでいた盛岡英治郎（工機械17年卒）、中村英石両君と白馬主稜を登っております。この主稜は後に徳永、大島さんが厳冬期の初登攀に成功されましたね。

戦後、山とスキーに全く遠ざかってしまいましたが、昭和55年以降、何度も細野を訪れ、与兵衛夫人、庄司さん、徹也さんにお会いでき、平成9年には遠藤君と60年ぶりの再会を対岳館で果たすことが出来ました。

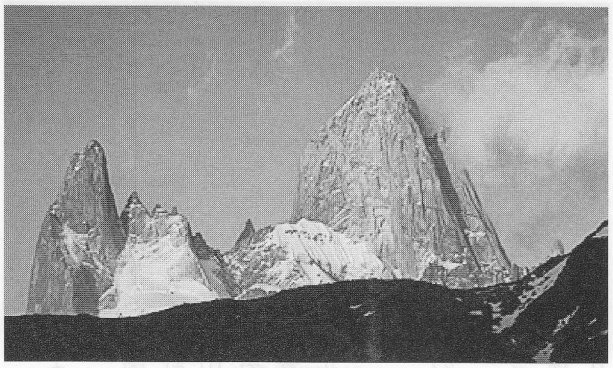
■遠藤常忠氏から

私は昭和13年工学部電気科卒業です。工学部の前身に大阪工業大学と称した時代があったことは知っていましたが、そこに山岳部があったとは全く寝耳に水でした。工学部当時の山岳部の友人、知人を思い出してみても故人ばかりが多く、唯一友人の河原君に聞いてみましたが、あまりはっきりした記録は残っていないとのことで、調査にご協力できないことをお許し下さい。

地球の裏側で初日の出見た
パタゴニア・フィッツロイ遠征

畑　秀信

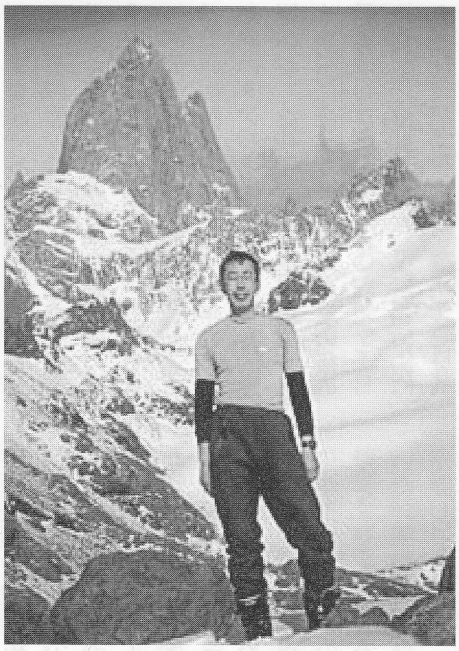
「年末4週間の特別休暇に、どこかへ遠征したい」。2002年夏、私が所属する社会人山岳会、東京YCCの飲み会で、それとなく持ちかけたところ、瀧山氏が反応してくれたのが事の発端である。行き先はどこでも良かったのだが、2人パーティーで行けて、時期的に妥当なところ



フィッツロイ（右）とポアンスノー

ということでパタゴニアのフィッツロイ（3441㍍）に決定。84年に初登された際のアルゼンチンルートを使うことにした。

どの記録を見ても、この山の天気の悪さは相当なものらしい。好天に恵まれるチャンスは極めて低く、いったん嵐に遭遇すると、想像を絶する脱出劇になる。当時、フリークライミング以外ほとんどやっていなかった自分の実力を考えても、4週間で成功する確率は極めて低そうだった。おまけに出発前のトレーニングで両腕が腱鞘炎になり、遠征中ずっと悩まされることになった。



フィッツロイと筆者

成田を出て3日目に、遠征の起点となるカラファテへ。1日かけて1カ月分の食料、燃料を手に入れる。ベースまでは馬で入山することにしたので、食料、酒だけは十分過ぎるほど購入する。農業国だけに、すべてが安い。登山基地となるエルチャルテンへはバスで。到着時は好天が続き、町の入り口の公園事務所からセロトーレ、フィッツロイが正面に見える。しかし、それも束の間、我々が着くと同時に天気は下り坂の周期に入ったようだ。ここから、フィッツロイのベースとなるリオブランコまで4時間ぐらいだった。

BCは、唯一そこだけがというような森の中にあった。この森が、強風の続くこの山での安息地をつくりだしている。アルゼンチン、アメリカ、カナダ、ドイツなど世界各地からこの山をめざして来ている。天気待ちの停滞がほとんどだけに、彼らとコミュニケーションをうまくとることが、この山登りを成功させる一つのポイントでもある。彼らの話では、11月にも好天があり、我々がめざすアルゼンチンルートを25時間で登った組がいたとの情報を得る。

ずっと悪天が続き、ACとなるパソスペリオールまで荷上げしたものの、アタックチャンスは来ない。気圧計を眺めながら、天気の周期を見極めることが極めて重要になる。ひどい日には、安息地であるBCでも木々が飛ばされるのではないかと思うぐらい強い風が吹き、地面が揺れるのにはびっくりした。周囲の幾人かは諦めて、いったんエルチャルテンに下りたようだ。停滞時は、覚悟を決めて国際交流、酒と食い物、読書と、リフレッシュする。

12／29　晴れ

前日にACまで入る。朝は晴れていたが、天気があやしい。アタックすべきか迷う。スイスパーティーはカリフォルニアルートへ出かけたようだ。ドイツ人2人はフィッツロイの隣のギョーメへ。我々は結局、BCへ下りることにする。案の定、午後から天気が崩れた。この判断は今回の成否のポイントになった。

12／30　快晴

再度、ACへ入る。スイスパーテ

ィーは前日は敗退し、エルチャルテンまで下りたようだ。ドイツ人も前日敗退し、下山したまま。

12／31　快晴

夜中の0時にスタート。ヘッドランプをつけてイタリアンクーロワールへ。2時半、取り付き。アイスフォール、雪壁を経て、4時間ほどでイタリアンコルへ。コルからはセロトーレ、大陸氷河が見え、絶景を楽しむ。岩稜を1時間登り、ついにアルゼンチンルートの取り付きへ。ラバーソールに履き替え、いざ登攀開始。腕を痛めている私がまず空荷で4ピッチ、リードさせてもらう。

快適なクラックが続く。5・10のグレードだが、古い残置FIXもあり、躊躇なく利用する。ここからつるべで行くことにする。5、6ピッチ目がダイヒードラルと呼ばれる見栄えの良いクラック。

9ピッチ目でルート図に「ICY」と表示のある方へ行くが、氷のつき方が悪く、行く手を阻まれる。結局、左にある残置FIXをめざす。左に行き過ぎたみたいで、ルートを見失う。登れないことはないので、そのまま上がる。11ピッチで大レッジへ。23時。日没寸前だ。ここで水をつくり、スープなどを飲みながら短時間のビバーク。寒くて、ほとんど眠れない。

1／1　快晴

5時頃、明るくなる。こんな地球の裏側の岩壁で初日の出を見ることになるとは夢にも思わなかった。しかし、2003年元日に登頂という幸運に巡りあえるのももうすぐだと気を引き締める。

6時、登攀再開。いきなり5・9AOだが、疲労と寒さで動きが鈍く、時間を食う。荷が重く、ユマーリングに1時間ほどかかる。12ピッチの終了点で西壁のスーパークーロワールを登って下降してきたスイスの2人に会う。この山に取り付いていたのが我々だけでないことを知る。後で聞いたが、彼らは冬のセロトーレを登った有名な登山家らしい。

15ピッチ目。畑が行くが、うっかり氷に足をすべらせてしまい、5㍍ほどフォールする。けがはなかったが、尻を強打した。やはり疲れているのだろう。16ピッチ目でやっと終了点へ。14時。ここで重い目をして荷上げしたプラブーツに履き替え、ギアをデポし、頂上へ向かう。

15時8分、ついにフィッツロイ頂上。思う存分、景色を楽しむ。セロトーレ、大陸氷床など、すごい所にいることに改めて感動する。30分ほど頂上に滞在し、下山開始。とにかく相当疲れているだけに、お互いに気を引き締める。終了点からは懸垂下降。2ピッチ目でロープがひっかかり、登り返す羽目に。日も落ち、夜間行動となる。あと3ピッチのところで、またロープの回収に苦労する。岩壁取り付き着2時30分。

1／2　快晴

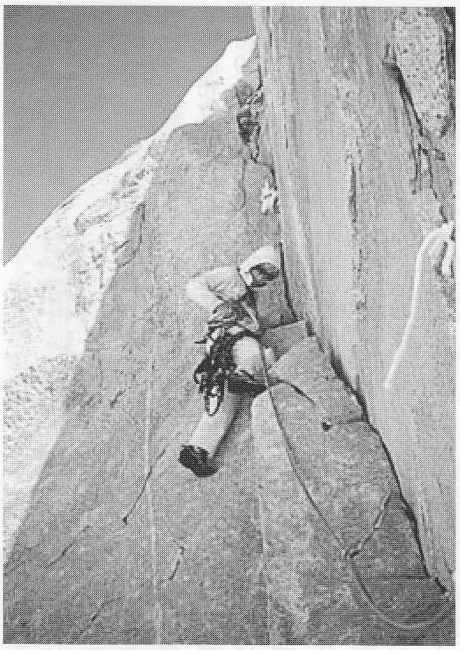
こんなに天気が続くのは、なんとラッキーなことか。我々のようなスロースピードでは途中で嵐に遭遇してもおかしくないはず。真っ暗な中、トボトボとイタリアンコルへ下降するが、思考能力が低下しているのか、下り口がわからず迷う。登りは1時間で行けたのに。結局、コルに着いた時は朝を迎えていた。疲労のためコルで座りこんでしまう。なんとかコンロに火をつけ、水をつくり、前日朝以来の水分補給をする。

7時発。ここからは残置FIXを使い、クーロワールを懸垂で下りる。最後のピッチを終えて氷河に下り立ち、やっと終わった安堵感が押し寄せる。11時、パソスペリオール着。デポ食料を存分に食い、雪洞内で仮眠する。寒くて17時に起き、撤収し下山にかかる。途中、何度も振り返って、フィッツロイを眺め、登頂の余韻にひたる。23時、BCを出て丸4日で帰還する。すべてが終わった気がして、気分が晴れる。

◇

下山後は、帰国まで1週間あったので、カラファテから5日ほどかけてパイネ山群のトレッキングに出かける。ここもパタゴニア特有の嵐をいかに避けてアタックするかが成否のポイントになりそう。ただ、フィッツロイよりは幾分穏やかそうだ。

お蔭様で、パートナーと幸運に恵まれて登頂に成功し、最高の休暇を過ごせました。遠い国ですが、時間さえあれば行く価値の十分ある山域です。情報を入手されたい方はご一報を。（1984年人間科学部卒）



登攀12ピッチ目くらい

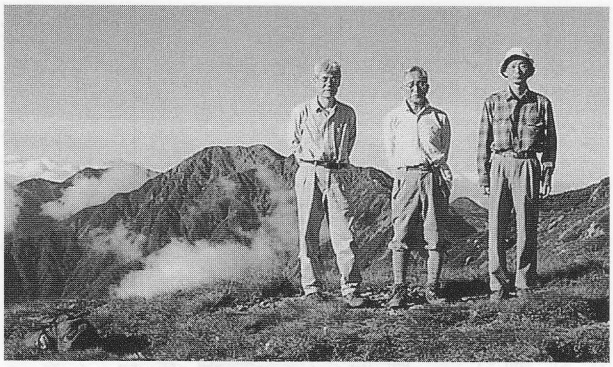
50年続く恩師との山行

梶本　孝治

大阪市立船場中学校3年生だった昭和30年8月、山好きの先生（国語担当の大安隆先生）に引率されて立山・剱へ登ったのが「日本アルプス」との初めての出合いであり、恩師との登山の始まりでした。その後、中央アルプス、八ケ岳、大峰山、比良山、吉野の山々、そして我が家の裏庭のような六甲山を含め足かけ50年、山登りをご一緒してきました。

特に、昨年9月、先生の75歳の誕生日記念に南アルプスの千枚岳から赤石岳にご一緒できたのは最高の思い出でした。悪沢岳、荒川中岳、荒川前岳、小赤石岳、赤石岳と、3千㍍を超す5峰が連なる山群は槍・穂高連峰に劣らない山容を誇っています。しかし、アプローチが極めて悪く、山岳部時代の冬山で登って以来、思い出の山として埋もれていました。ところが、全く偶然に、小学校から大学まで私と同窓で、同じ恩師に山の薫陶を受けた後輩の松澤一幸氏（基礎工卒、奈良県食品研究所技官）が加わり、先生が日本アルプスで踏破されていない数少ない山群への登山が実現したのです。

幸い、天候に恵まれ、千枚岳から荒川前岳にかけては南アルプス北部の山々や中央アルプス、槍・穂高に加え、富士山も間近に眺めることができました。荒川岳南面のカールに広がるお花畑ではマツムシソウ、トリカブト、イブキトラノオなどの高山植物が咲き乱れる天上の楽園散歩でした。勉強はともかく、山登りでは一、二の気心の知れた教え子を従えて、最後の赤石岳頂上に立った先生は、本当にうれしそうな笑顔でおられたのが何より印象的でした。



千枚岳～悪沢岳の山稜で（左が筆者）

42年前、山岳部2年の冬山合宿で縦走をした時（故・佐藤茂さんがリーダー）とは別世界でした。当時はまだナイロン製テントがなく、雪が凍りついて撤収が大変なレーヨン製テントなど重装備を担いでの縦走でした。ゴーグルをしていても目を開けられないほど猛烈な地吹雪の合間を顔面凍傷になりながら進む、厳しい経験でした。そんな記憶もすっかり風化してしまっていましたが、唯一、千枚岳から悪沢岳へ向けて乱食い歯のような岩稜を下りる個所で、烈風の中をアイゼンのツメを立て、岩角をつかんで一歩一歩慎重に下りたのを思い出し、42年前にタイムスリップしたような一瞬がありました。

中学3年生の時の立山・剱登山を振り返ると、当時は日本山岳会がマナスル初登頂をめざしていた時期ですが、登山は大衆化しておらず、世情もまだ戦後色を残していました。その時のセピア色に変色した写真が手元に残っていますが、背景の山々がなければ、まるで大阪駅での買い出しの一団としか見えない風体です。リュックはキスリングではなく、買い出し用そのもの。登山靴も通学用の編み上げの革靴に荒縄を巻こうかと話したのを覚えています。山小屋の食料事情も悪く、何もかも昔日の感です。

還暦を過ぎた今、半生を振り返ると、「山」は人生のかけがえのない一断面であったと思います。老齢を迎えたヘッセは「人間らしく老いること、そして年齢にふさわしい心構えと知恵をもつことは、ひとつのむつかしい技術である。……私たち老人がこれをもたなければ、追憶の絵本を、体験したものの宝庫をもたなければ、私たちは何であろうか！」と述べています。また、8千㍍の高峰を無酸素で登り、「超人」と呼ばれているメスナーは「登山はそれぞれの能力に応じてルートを選び、自らの能力に挑戦することが最も大事……」と。さらに「真の登山家は高望みをせず、見栄をはることもない」と述べています。人それぞれに「山」への思いは違いますが、登山を通して私なりに自らの生き方を学んできたのではと思います。中学時代に先生に導かれて、その一歩を踏み出したことは非常に幸運でした。この神戸には、現役社会人として私が成すべき課題がまだまだ残っているという自負心を持って仕事に取り組むこと、そして、今秋は再び先生とご一緒して黒部下廊下のトレースを「追憶の絵本」に加えることを楽しみにしています。

（1963年工学部卒）

大阪大学山岳部 活動報告

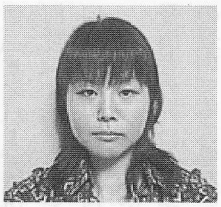
2003年度

リーダー所感

渡辺　景子

2003年度は新入部員5人を迎え、現役部員7人で活動した。

3月の春山合宿は、爺が岳南尾根から鹿島槍ケ岳へ登頂し、赤岩尾根を下った。天候に恵まれ、暖かい日差しの中で白い尾根を歩く、気持ちのよい山行であった。



5月の新歓合宿では涸沢にベースを張り、渡辺と尾崎OBが前穂北尾根に挑戦した。渡辺の体力不足で帰幕まで16時間かかったが、いい経験になった。1年生の林も初めての合宿で雪のある山の楽しさを感じたようだ。

夏合宿は縦走と定着合宿を別におこなった。縦走は燕岳、槍ケ岳東尾根、黒部五郎を経て、折立へ下りた。初の長期山行だった田中は初めて見る山の深さに感動した半面、腹痛やひざの痛みとも格闘し、充実した合宿になったようだ。

定着合宿では真砂沢をベースに八つ峰のフェースや源次郎尾根から剱岳本峰に至るルートなどに取り付き、藤井は寺田OBとチンネ左稜線に挑んだ。田中、光永両OBにも多くの技術を学び、それぞれがひと回り大きくなって合宿を終えたと思う。

9月には渡辺、大場、網野が再び真砂沢へ入った。天候が悪く、阪大出身の小屋の方に大変親切にしてもらった。10月、蓬莱峡の岩場でのトレーニング中に事故に巻き込まれ、新谷が顔を縫うけがを負ったが、大事には至らなかった。

偵察合宿では槍ケ岳、薬師岳に向かった。雪の少ないアイゼン合宿を経て、冬合宿には2パーティーを組んだ。上級生と高沢OB、寺田OBで槍ケ岳中崎尾根に取り付いた。大晦日に突然現れた二つ玉低気圧に当たり、頂上まで行けず敗退した。1年生と河野OG、磯部OBは大山へ行った。強い冬型の気圧配置の中、1年生はラッセルや、ホワイトアウトの時のコンパスワークなど冬山の楽しさを感じてくれたと思う。

2004年度は再び男子部員のみになったが、その分、パワフルな山行ができるだろう。

◆春山合宿／後立山・爺が岳南尾根～鹿島槍ケ岳～赤岩尾根

［期間］3月21日～24日

［メンバー］渡辺（2年、CL）、藤井（1年、SL）、河野（3年）、山岸（1年）、光永、寺田、磯部（OB）

21日（晴）冬季ゲート（13・00）—爺が岳登山口（14・40）

初日は、松本を出たのが昼になったため、登山口まで車道を歩いた。

22日（曇）爺が岳登山口（4・55）—ジャンクションピーク（11・00）—爺が岳手前の稜線上2630㍍付近（13・15）

登山口から冬季ルートのある尾根まで1ピッチだけラッセルをした。ルートに出るとトレースがあり、樹林帯を気持ちよく歩く。途中で磯部さんが目を負傷したため、適当なところでテントを張った。無風快晴状態で、テント場も選び放題だった。剱に見守られながら眠る。

23日（晴）テント場（5・15）—爺が岳山頂（6・15）—冷池山荘（8・35、テント設営）—鹿島槍ケ岳山頂（11・20）—冷池山荘（12・50）

すばらしいモルゲンロートに感動。今日も快晴で、風も弱い。爺が岳を越えた。剱岳と槍ケ岳が見えた。雪庇が出ているが、見通しがいいので、上に乗ることもなく、冷池山荘へ快適に歩く。テント設営後、鹿島槍までピストン。頂上には方々の尾根から登ってきた登山者が集まっていた。寒いので、すぐにテントに戻り、たくさん食べてたくさん寝た。

24日（晴）冷池山荘（6・10）—高千穂平（7・40）—大谷原（11・20）

赤岩尾根を下った。入部して間もない山岸はアイゼンの訓練が十分とはいえなかったが、OBのサポートがついて慎重に下った。

天候に恵まれ、とても快適な春山

春山合宿・赤岩尾根の頭で

だった。物足りないという気もしたが、偵察に失敗しているので、この程度でよかったと思う。

◆新歓合宿／涸沢

［期間］5月3日～5日

［メンバー］渡辺（3年、CL）、河野（4年、SL）、林（新人）、川口、寺田、尾崎（OB）

3日（晴）上高地から涸沢まで、登山者の列について歩いた。中高年の登山ブームをひしひしと感じる。

4日（晴）

【河野、林、寺田、川口】雪上訓練（6・30～8・00、涸沢ヒュッテ西斜面で滑落停止、歩行、FIX通過）―穂高岳山荘（11・10）―涸沢岳山頂（11・50）―涸沢（13・37）

下山時の尻セードが楽しかった。

【渡辺、尾崎】前穂北尾根

涸沢（4・20）―5・6のコル（5・20）―前穂頂上（11・20）―奥穂頂上（16・00）―涸沢（20・00）

雪が少なく、夏道をアイゼンで登る個所が多かった。前穂頂上までは順調だったが、吊尾根を経て奥穂まで行く途中でペースダウンし、奥穂ピークに着いたのは16時。腐った雪の雪壁をロワーダウンしたり、白出のコルで卯城、畑両OBに会ったりして、テントに戻ったのは20時だった。

5日（晴）涸沢（8・20）―横尾（10・00）―上高地（13・00）

早々と下山した。

◆夏期縦走合宿／北アルプス燕岳～槍ケ岳～黒部五郎岳～太郎小屋～折立

［期間］7月25日～28日

［メンバー］渡辺（3年、CL）、藤井（2年、SL）、田中（1年）

25日　登山口（7・40）―合戦小屋（10・20）―燕岳（12・10）―大天井ヒュッテ（16・00）

ずっと雨だったが、日が暮れてから穂高・槍・剱が見えた。今年は残雪が多い。

26日　大天荘（5・00）―西岳ヒュッテ（8・30）―大槍ヒュッテ（12・05）―槍岳山荘（13・40）

前日とは打って変わって晴れ。大天井岳をピストンしてから出発。槍の先まで東鎌尾根がきれいに見えた。田中が腹痛で苦しんでいたので、彼のペースに合わせ、他の登山者と交流をしながら、ゆっくりと槍岳山荘へ向かった。テントを張ったあと、槍ケ岳をピストンした。

27日　槍岳山荘（4・30）―双六小屋（9・45）―双六岳（11・35）―黒部五郎小屋（14・45）

槍からのご来光を拝む人たちを横目に出発した。西鎌尾根は晴れたりガスがかかったりで、幻想的だった。ガスの中、双六岳を通過し、三俣蓮華では疲れて3人ともダウンした。田中の足はマメが真っ赤になり、とても痛そうだった。

28日　黒部五郎小屋（4・35）―黒部五郎岳の肩（7・20）―太郎小屋（12・40）―折立（15・45）

岩がごろごろした黒部五郎の稜線ルートを歩く。ガスがかかって、視界はない。田中は足も腹も痛く、顔がゆがんでいた。稜線を外れて折立へ下りるとき、田中は足をがくがくさせながら気合だけで踊るように斜面を下っていった。

夏山合宿・雪上訓練

◆夏季定着合宿／剱岳

［期間］7月31日～8月6日

［メンバー］渡辺（3年、CL）、藤井（2年、SL）、林、田中、新谷（1年）、田中、光永、寺田（OB）

今年は冷夏のために雪が多く、雪上訓練は充実したし、岩場の取り付きまでが楽だった。雪上訓練は田中OBの指導のもと、日に焼けるまで行った。藤井のチンネ左稜線、渡辺の初オールリード、1年生の初本番は天気も持ち楽しめた。源次郎尾根では急登、簡単な岩場、懸垂下降や、急な平蔵谷下りなどをそれぞれが楽しんだ。合宿の後半、台風が接近してきたために早めに下山する。

	31日	1日	2日	3日	4日	5日	6日
渡辺		入山	雪訓	C	源次郎	遠足 沈殿 ビバーク	下山
藤井	入山	雪訓		チ			
林				C			
田中				源	C		
新谷		入山					
田中(OB)	入山	雪訓		下山			
光永			入山	源	C	下山	
寺田				チ	源		

◆表の略字は
C…八つ峰VI峰Cフェース
チ…チンネ左稜線
源…源次郎尾根から剱岳本峰

◆**個人山行／剱沢周辺**

［期間］9月23日～25日

［メンバー］渡辺（3年、CL）、大場（1年、SL）、網野（1年）

23日（快晴）室堂（8・10）―別山乗越（10・18）―真砂沢ロッジ（13・30）

長次郎谷の先の八つ峰からの沢との出合にはクレバスが多く、少し緊張した。まだ紅葉には早い。

24日（曇りのち雨）真砂沢ロッジ（5・15）―剣山荘（7・40）―剱岳頂上（10・38）―真砂沢ロッジ（15・30）

雨の中、別山尾根から剱岳に登った。一般登山道といえども鎖場はなかなかスリルがある。

25日（雨）真砂沢ロッジ（7・15）―室堂（12・30）

入山時よりも山肌が黄色くなっていた。室堂ではびしょぬれの姿を観光客に白い目で見られた。

◆**冬山偵察合宿／槍ケ岳中崎尾根**

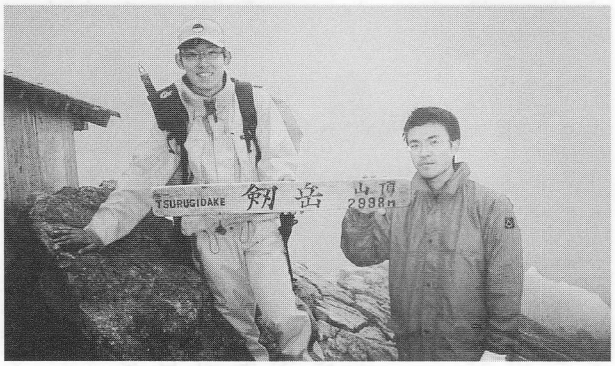
［期間］11月1日～3日

［メンバー］高沢（OB、CL）、渡辺（3年）

1日（晴）雪もなく、ブッシュもなく、水7リットルを背負って中崎尾根をたどった。飛騨沢がよく見える2500メートル付近でテントを張った。

2日（曇）核心と思われる西鎌尾根との合流地点をノーロープで進み、槍の肩まで行くと、雪が舞っていた。頂上までさっさとピストンし、大喰岳へ向かった。下山に使う予定のこのルートは踏み跡があり、雪がつくと手ごたえがありそうだった。沢に下りる手前で藪漕ぎをしていて渡辺のピッケルがなくなった。

3日（雨）槍平から新穂高温泉へひたすら歩いた。



個人山行・剱岳頂上で

◆**春山偵察合宿／薬師岳**

［期間］11月2日～3日

［メンバー］藤井（2年、CL）、河野（4年、SL）、網野、田中、林（1年）

2日（曇）折立（8・10）―太郎小屋（12・40）―薬師岳山荘（15・20）

太郎小屋までは、きれいに整備された道が続いた。稜線に出ると所々広い尾根があり、本番ではコンパスワークが重要になることを確認した。

3日（雨）薬師岳山荘（5・30）―薬師岳（6・25）―太郎小屋（9・50）―折立（13・10）

風雨があって、とても寒かった。雪も混じり、岩と雪のミックスのような道になった。頂上を下りてテントをデポしたところに戻ると、雨はやんでいた。やはりルートの取り方が課題になりそうだ。

◆**アイゼン合宿／木曽御岳**

［期間］11月22日～24日

［メンバー］渡辺（3年、CL）、藤井（2年、SL）、網野（1年）、高沢、寺田（OB）

22日（雪時々曇のち晴れ　風強い）御岳スキー場（6・25）―王滝頂上（11・43）―二の池（13・10）

登山口に着いて、雪が少ないことがすぐわかった。田の原からは雪があったが、積雪5センチくらい。順調に高度を上げて王滝頂上へ。トラバースして二の池に向かう。途中、アイスバーンがところどころあった。18・30ころから高沢、藤井、網野がビバークへ出発。冬型の気圧配置となり、寒気が流入して風が強く、厳しいビバークだった。

23日（快晴、風あり）二の池（6・40、雪上訓練）―継子岳（12・15）―二の池（13・40～14・55）―王滝頂上（15・25）

ビバークで一夜を明かした高沢と藤井は足が思うように動かないまま剣が峰へ。雪が少なく滑落停止の練習ができないため、歩行訓練もかねて継子岳へ遠足に行く。天気がよく、展望が良かった。

24日（晴れ）王滝頂上（6・45）―八海山（9・20）

風のある中、撤収。順調に下山。

◆**新人冬山合宿／大山**

［期間］12月27日～28日

［メンバー］網野、大場、田中（1年）、磯部、河野（OG）

27日　登山口（8・30）―六合目（12・00）―弥山山頂小屋（16・30）

西高東低の冬型気圧配置。夏山登山口からは膝下のラッセル。土曜日ということもあり、多くの登山者がいた。他のパーティーは六合目で行動を打ち切ったが、悪天下での経験を積むために行動継続。腰から胸までの深いラッセル。八合目からは視界も悪く、強い風にあおられながら進んだ。八合目から頂上小屋までノ

ンストップで歩いた。

28日 弥山山頂小屋→六合目→夏山登山口

朝からホワイトアウト。コンパスを頼りに歩くが、途中、進むべき尾根が見えず、尾根を一つ間違えた。視界が晴れて間違いに気づき、石塔の立つ場所に戻った。コンパスワークの甘さを感じて反省。雪上訓練もして下山。

短い山行であったが、反省することも多く、またその中で学ぶことも多かった。悪天下での行動、ラッセル、コンパスワークなど、さまざま経験ができ、1年生にはほどよい山行ではなかったかと思う。

◆冬合宿／槍ケ岳中崎尾根

［期間］12月29日～1月1日

［メンバー］高沢（OB、CL）、渡辺（3年）、藤井（2年）、寺田（OB）

29日（晴のち曇のち雪）新穂高温泉（6・30）―1650㍍付近（9・20）―1924㍍付近（14・00）

トレースはあったが、前々日に積もった雪を踏みしめながらの急登。他にもたくさんのパーティーが入山しているのを感じた。危険な所もなく、時々、腰まで埋まるラッセルをしながら、尾根がやせる手前の所でテントを張る。

30日（雪のち晴）出発（6・40）―奥丸山（12・05）―2388㍍付近（14・10）

樹林帯の尾根のせいか、風も弱く、雪が降る中、ワカンを履いて出発した。腰までのラッセルが続いた。奥丸山まで行くと視界が開け、槍平からのトレースと合流してラッセルがなくなった。奥丸山から見る穂高連峰がとてもかっこよかった。

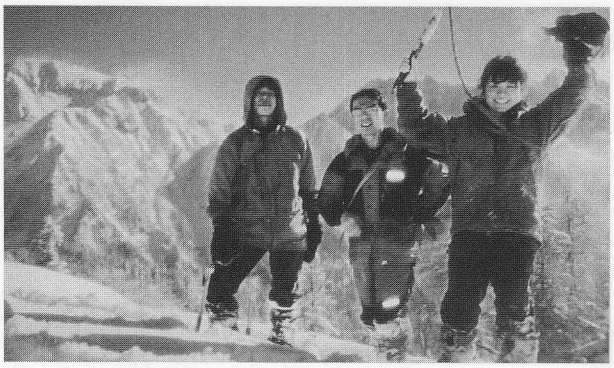
31日（雪）出発（6・50）―2388㍍付近（13・30）

前日の天気図からは予測できなかった雪が降り続いていた。西鎌尾根とのジャンクションピークを目指して出発する。進むにつれて風が強くなった。JPの下部のルンゼ取り付きに着いて、引き返すことを決めた。下りでは1ピッチだけロープを出した。4人が下り終えた時には、登ってきたトレースはすでに消え、ホワイトアウトの中、下り始める。年越しはお汁粉と油揚げ入りのそばだった。天気図を書くと、前線をそれぞれ伴った二つ玉低気圧が突然現れていた。翌日下山することを決めた。

1日（晴）出発（6・40）―槍平（10・00）―新穂高温泉（13・20）

朝はおもちを食べた。すっかりトレースが消えた尾根をラッセルしながら進むと、左手に大キレットが赤く光っていた。稜線は雲がかかっていたため、ご来光は拝めなかったけれど、スケールの大きい正月の朝だった。槍の穂先が朝日に輝いていたが、背を向けて下山した。雪崩の危険はあるが、早く下山できる槍平経由のルートを選んだ。新穂高温泉には正月を温泉で過ごす観光客がたくさんいた。

（文責・渡辺）



冬合宿・奥丸山下部で。後方は大キレット

◆2004年度の現役部員は次の通りです。

リーダー＝藤井信行（歯学部4年、兵庫県出身）

サブリーダー＝網野善久（理学部生物2年、東京都出身）

渡辺景子（基礎工学部・システム4年、埼玉県出身）

大場貴信（工学部・応用理工2年、静岡県出身）

林　健一（理学部・物理2年、大阪府出身）

本多立彦（工学部・応用自然1年、兵庫県出身）

◆監督には磯部寛氏（理97）に代わって、青木成一郎氏（理95）が就任しました。青木氏は東大大学院を出て5月に理学部宇宙地球科学専攻の研究員として戻ってきました。

会員の近況

（白馬集会と新年会の出欠はがきなどから抜粋しました。その後の変動などは未確認。卒業年次順。敬称略）

加藤　幹太（理27）公職からすべて退き、ゆっくり暮らしています。旧友が少しずつ減っていくのが寂しい限りです。阪大山岳会の発展を願っています。

（編者から＝加藤氏は2004年「春の叙勲」で「瑞宝重光章」を受章されました）

久保　三朗（工27）加齢（76歳）で、登るのはもう無理。せめて山を見て来ようと、ここ数年、毎冬、ヨ

ーロッパスキー行を定例化。幸い、代表的なスキー場は必ず大きな山群に位置しており、ゴンドラリフト類の発達によって3千㍍を超える頂上や主稜線まで容易に上がれます。おかげで東はドロミテ、チロルから、西はモンブラン、ヴァノワァーズ各山群まで有名な所はほぼ完了です。

川島　勇（工29）6年前、C型肝炎による肝ガンの手術を受け、体力激減。回復に数年かかりました。ウォーキングやゴルフで体を鍛え、漸く、白馬集会に参加し、八方尾根や白馬大雪渓、遠見尾根を50年ぶりに訪れて喜んでおりました。今年（03年）になって肝ガンを再発、4月に手術しました。当分は（会合に）欠席です。

二木　節夫（工29）ビジネスから完全にフリーになり、毎日、気ままに暮らしています。家の近くに金華山（329㍍）、百々ケ峰（415㍍くらい）などがあるので、暇な時にちょこちょこ登っています。それほど高い山ではありませんが、それでも登れる体力、気力のあるのが、ありがたい限りです。

大村　一生（理29）「多病息災」に暮らしています。人並みにあちこちに具合の悪い所が出てきて医者通い。これも暇つぶしと強がっています。したいようにして、食べたいように食べ、飲みたいように飲めているので、幸福と言えるのでしょう。

三枝　礼子（薬30）順調に老化進行中で、ほどほどに雑用に追われております。

濱　一枝（薬30）昨年11月、加古川ツーデーマーチに参加し、1日10㌔、2日間で計20㌔歩きました。日ごろ運動不足ながら、2日間歩き通せたので、ちょっと喜んでいます。平常は点訳ボランティアとして忙しい日々を送っています。目の不自由な方たちの中に、山登りを楽しむ人たちもいること、ご存知でしょうか？

石澤　命久（歯32）明和病院でパートタイマーの歯医者をやっています。スキーは、昨シーズンは北海道とイタリアのコルチナダンペッツォに行きました。スキーとクラリネットのための筋力トレーニングをやっています。

札幌・大通公園　え・辻川眞

辻川　眞（経32）北海道の自然を満喫したくて、2、3年、こちらで過ごします。特に、スキーが大好きなものですから。大雪山系は限りなく美しく、優しい山容は70歳の高齢者向きで、うれしいことです。それに、登る人が極めて少なく、人間に値打ちが感じられる場所です。信じられないアスピリンスノーが惜し気もなく広がっています。絵も描いています。今年中にホームページを開設します。

四方　大中（法33）できるだけ趣味の分野を広げようと努力しています。もっか、ゴルフ、囲碁、読書、園芸、小唄、書道など。

山本　信樹（工35）百名山にチャレンジ中。02年は南アルプスを完了し、03年は北海道、九州、04年は上越、北陸を予定しています。同行者を探しています。

野田　憲一郎（経35）日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT-J）理事として山の環境保護に取り組んでいます。03年4月には国内主要7山岳団体主催の国際環境会議をやりました。HAT-J近畿支部立ち上げ準備中で、環境保護に関心ある方の入会をお奨めします。

廣瀬　貞雄（工36）日常生活でもなるべく歩くようにしています。03年3月21～23日の3日間、水フォーラムのイベントに参加して琵琶湖岸（大津市なぎさ公園）から瀬田川、宇治川、淀川に沿って中之島公園まで90㌔を歩きました。

村井　忠雄（工36）付近の山を歩くことを心がけていますが、なかなか暇が取れません。先日は高尾山―相模湖を4時間歩けました。徐々に体をつくってゆきたいと思います。

金子　忠男（工37）自由の身となり、趣味の木工に精を出しています。山の方はしばらくご無沙汰していましたが、また、ぼつぼつ出かけようと思っています。

田村　俊秀（医38）職場の山岳同好会で登山を楽しんでいます。昨夏は鳥海山と月山、5月連休は大日岳に行きました。近畿の近場に楽しい山がたくさんあるのに、今更のように喜んでいます。若者の姿はほとんどなく、山は熟老年で埋め尽くされています。

木村　弘子（医38）開業医として忙しく働いています。山登りは、ほとんどしていません。3年ほど前に屋久島・縄文杉（1500㍍）、5年

ほど前に富士山、それくらいでしょうか。スキーは続けています。

三澤日出夫（工38）直腸がんの手術後、2年近く経過し、全く元気で過ごしています。ただ、人工肛門をぶら下げているので、単独で宿泊することは未だ試みていません。勤めは「地域中小企業支援センターのコーディネーター」という正体不明の仕事を月に8～10日しています。ボランティアです。

梶本　孝治（工38）今年こそ早月尾根から剱を登りたいと思っているのですが、元気な仲間はおりませんか？

宇野　雅明（医39）相変わらず町医者（耳鼻科）をしています。最近は、60の手習いで始めたゴルフにはまっていますが、近郊のハイキングも時々しています。

横尾秀次郎（工39）東京支部の皆様との年1、2回の山登りに参加しています。下りにヒザが痛くなり、閉口しています。いい対策があれば教えて下さい。

大川　和秋（工39）「原点」の京都北山、比良山系、大峰、六甲など近畿の山を歩いています。原点に戻ったといっても、小さい頃のようにブッシュを分けて動物のように走り回るわけにはいかず、家内安全第一という歩き方です。先日は標高92～130㍍という日笠山縦走コースを選びました。幼少から中学時代まで毎夏、姫路に戻っていました。その際、山陽本線沿いの播磨平野に並ぶ小山を何となく不思議に思っていたので、少し確かめる気になったのです。ハゼの木が多いのに少し驚くとともに、クヌギの類の違いを知る機会にもなりました。

木原　秀幸（工39）仕事はボチボチ、健康に気をつけて毎日過ごしています。冬は毎年、北海道へスキーに行っています。昨年、六甲山縦走10回目を達成しました。今年からは海外の山登り、ハイキングを楽しむために英会話を勉強するつもりです。一緒に行ける人があれば、お願いします。

高田　邦雄（経40）性懲りもなく新聞記者をやっています。和歌山県有田市での2年間の支局勤務を終え、今年4月に奈良へ戻ってきました。新しい持ち場は自宅から車で7、8分の王寺支局。定年後の勤めは今しばらく続きそうです。

黒田　治朗（医44）今年は還暦で、体力の衰えを痛感しています。ゴルフの飛距離アップに悪あがきしている今日この頃です。仕事では医療のIT化で視力が低下して苦労しています。愚痴ばかり言わずに頑張ります。

畑中　薫（医44）多忙な仕事で充実していますが、学生時代の思いきりの暇がなつかしいです。

栗原　完治（法44）リストラで退職後、義兄の借りている市民農園でイチゴやタマネギに遊んでもらっています。

鹿野　信吾（理46）19年間勤務した病院をやめ、02年10月、自宅横にクリニックを開業しました。のんびりやるつもりでしたが、結構忙しく、慣れぬこともあり、バタバタしております。

上松　一雄（工50）名簿を見ると、最近の現役は少なくなったようですね。リストラの多い中、何とか残って頑張っています。最近は山登りではなく、時間の要らない水泳をやって体力維持を図っています。

大宅　幸夫（歯51）相変わらず、夏は沢登り、冬は山スキーというパターンです。昨年の盆には屋久島へ行ってきました。たまには女房と四国遍路もどきもしています。

明神　知（基礎工53）03年4月から東京に単身赴任しております。ソフトウェアの業界はインドや中国の追い上げで構造改革を強いられており、日本ではプログラマーという職種の見直しが盛んです。仕様をモデルで書いて自動生成するか、パターンや部品の再利用という古くて新しい問題に取り組み、アーキテクチャーに注力すべきだとアピールしていますが、どうなりますか？

佐々木　徹（経57）ゴールデンウイークは徳本峠から蝶ケ岳まで歩いて鍋冠山から下山しました。北アルプス前衛のマイナーな山域で、ほとんど人はいませんでした。

大石　真也（工58）03年5月に鳥取の大山に登りました。5歳の長男は完登できました。3歳の長女は少し担ぎました。

奥山　宏臣（医59）大阪府立母子医療センター（和泉市）に勤務して5年目です。小児外科をやっています。年に数回の金剛山と夏の沢登りを楽しんでいます。

戸叶　聡（経H1）ゴールデンウイークに八つ峰に行ってきました。好天に恵まれ、眺めは良かったですが、少々バテ気味でした。

編集後記

今号は、当会の歴史を書き換える大先輩諸氏の証言に加え、畑氏と梶本氏の海外、国内での対照的な山行記録を掲載することができました。長い会の歴史の中での、人それぞれの山行に思いは尽きません。今後も意欲的なご投稿をお待ちしています。

（会報担当・高田邦雄）